一統

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治卅八年五月十五日發行統一第百廿二號毎月一回十五日）

第百二十二號要目

○日蓮上人の宗義及系統（承前）…本多日生
△高橋五郎氏著日蓮論に於て……醉蝶
○日什大正師置文諷誦章（承前）…阪本日桓
△南無釋迦牟尼佛……
○寂日房御書（つゞき）……本多日生
△新らしき龍女……ひらさき
○懺悔錄（承前）……野茨花生
△管長撰擧外數件……
○不受不施史料（其五）……槐木日種
各地教信……
○余は如何にして信仰に入りしや……一太

御雛附ぞく
人形
小道具
武者人形
東羽子板
御注文に依り調製致候
東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

基礎金領收報告

一金參圓也　東京府品川本榮寺住職　吉田日宣殿
一金壹圓也（第六回）東京市牛込區原町久成寺住職田井日晃殿
一壹圓也　東京市淺草區象潟町　廣崎金十郎殿
一金壹圓也　岡山市旭町　高木トク殿
右御寄贈相成正に領收仕候段に謹て謝意を表し候也
明治三十八年四月　南松山町　統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割增但五厘切手を以てす
一諸讀申込の節は住所姓名を鮮明にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅八年四月十五日印刷發行
發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木曄學
印刷所　北澤活版所
東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所　統一團
東京市淺草區南松山町四十五番地

夫教主釋尊をば大覺世尊と號したてまつる。世尊と申す尊の一字を高と申す。高と申す一字は又孝と訓ずるなり。一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊とは號し奉る。釋迦如來の御身は金色にして三十二相を備へ給ふ。彼三十二相の中に無見頂相と申すは佛は丈六の御身なれども竹杖外道も其御長をはからず。梵天も其頂を見ず故に無見頂相と申す。是孝養第一の大人なればかゝる相を備へまします。孝經と申すに二あり。一には外典の孔子と申せし聖人の書に孝經あり。二には內典今の法華經是也。內外異なれども其意は是同じ。釋尊慶點劫の間修行して佛にならんとはげみしは何事ぞ孝養の事也。然るに六道四生の一切衆生は皆父母也孝養れへざりしかば佛にならせ給はず。今法華經と申すは一切衆生を佛になす祕術まします御經なり。

（法蓮鈔）

統一

日蓮上人の宗義及系統

本多日生講述
古定賢正筆受

各論　第三章　佛陀論

第二節　日蓮上人の佛陀觀上特殊の着眼點

予は前節の概論をうけて今一層切實に日蓮上人の佛陀觀を述べんと欲するなり先にも台當の關係を見よといひたるがげに天台の佛陀觀と日蓮上人の佛陀觀とは大に異なれるなり天台は數を立てゝ佛陀をとき有限性の佛陀をしか認識する能はず此に反して日蓮上人は無始無終の佛陀をとき無限性の佛陀を認識す是大躰の相違なり

曾て眞迦は其著破邪記に文句私記を引て曰く今の經には諸佛を以て皆本尊と名く故に他經の佛々の分身と異なれり大集經の與欲佛の中には彌陀阿閦佛等あり今の經に準せば即ち是分身なるが故也難して曰諸佛一体なりとは是法身平等なり諸經に常に明せり分身の義にはあらず化城喩品に明さく昔の十六王子今八方に作佛す然も因果各別なり分身とはいはざるなり

玄文に釋尊の分身の外に亦諸佛あり諸佛も亦分身あり即ち觀普賢經と神力品とを引て證とせり亦信解の疏には彌陀釋迦分身の義は此經の始末に全く此旨なし亦或人曰く迹門には諸佛各異なれり本門には一体となす故に本門の分身は諸佛一体なり難じて曰く疏及び記には此義なし神力品觀經等豈二門の心にあらざらむやと此說に依て見れば法身平等といふは彼は極力排せり釋迦と彌陀とは因果を異にせる佛陀なるが故に本佛迹佛の關係なし且つ亦分身の關係もなしといふなり

此說の是非は且く措き法身平等を排したるは見るべき點なり村上專精氏は天台は釋迦中心說なりとて大いに稱讚せられたれども天台の佛陀觀は詮じつゞめれば毘盧の一本に歸するものにして法身論なり然るに之を稱揚したるは何の意たるやを知るに苦しむ日蓮上人は開目抄に涌出壽量を除いては皆始成を存せりといひ壽量の佛陀を以て最高唯一の佛陀久遠無始の佛陀となせり法身平等論に入りしものは到底絕待的具体的の佛陀を認識すること能はず村上氏の如きは眞の佛陀觀に到着することあたはざるものなり

眞迦は日蓮上人の佛陀觀を以て軌道を逸したりとなせども逸したるにあらず却て盛んに絕待的本佛觀を成立せしなり台當の關係及び本佛に於ける相對解釋絕待解釋は所論つきたれば畧す

第三節　境智の關係に於ける生起の別

天台は境本論をとり日蓮上人は智本論をとる境本論は法身爲本となり智本論は報身爲本となる此の故に天台は非人格本佛論に入り日蓮上人は人格本佛論に入る古來天台を理本事迹といふもの此故なり

當体義抄に境智を論じて智佛をとり立正觀抄にも境智を論じて智佛をとる但し此智佛はやがて人格身なるが故に悉佛となるなり

天台が玄義七に却て最初を指して本となす中間及び今日の成道も三世殊なれども毘盧遮那の一本に歸す百千の枝葉同く一根に赴くに異ならずといふもの即ち中心の佛なりこれは毘盧の一本を以て絶待的統一佛となせしなり天台にありては釋迦統一論は相對的の見解なり日蓮上人は釋尊を以て絶待的統一佛となせしなり學者審思すべし

第四節　法身爲本と應身常住との別

先づ第一に所論の綱目を擧げんに

佛身觀の名義
天台三身の解
隔歴三身の説
三身相即の説
法身爲本の大要
應身常住の妙旨
應身常住説に對する辨妄

等の七條なり

日蓮上人以外の佛陀觀は悉く法身爲本に陷り獨り日蓮上人のみ應身常住説を唱へ給へり此ことを明にするには先佛身觀名義のさばき方を知り尋で天台の三身説を見更に隔歴三身と三身相即との區別を明にするを要す天台は曰く諸法隔は歴法身のみ相即なり發迹顯本の三如來は永く諸經に異ると發迹顯本の三如來とは三身相即の如來のことなりこれまでの議論は何人も知る處なるが是以上に法身爲本と應身常住との別を知らざる可らず之に依て始めて天台日蓮の優劣を定め得べし

佛身觀の名義

從來一定せず各其書に就て定義を下さゞる可らず先づ經論に出でたるものを擧げんに初め二身門あり成實論には眞應二身を立てたり佛を見るに二面の觀察を下し之を隔歴極にきり離して見るなり即ち佛の本体は眞身常住にして本体より凡夫救濟の爲に應化するものは應身の釋迦是なり眞身なるものは應身の奥にありてうれが常住不變の身なりといふが如き考をもち居れり

或は亦眞身を降誕の釋迦なりとして應身とは教化の必要上神通に依てかりに鹿馬等に現れたる佛を指すものあり、拆空觀を立てたる三藏教にては此説をとる少しく進めるものは眞身を常住とする成實以後の見解なり尙進めば三身説中の法報二身を眞身とし應を應身とする説なり此説にては眞身は一面より見れば虛空大の理となり他の一面より伺へば智を有せる人格化せる佛陀となる

村上氏は三論にては二身法相に到りて始めて三身説を主張したりとなせども大論にても三身説を主張せり即ち法報應の三如來を立つ法身如來とは人格の佛陀を指すにあらず本來の法性の理を指す也故に文に非因非果有佛無佛性相常然とあり亦報身とは知稱如理と説けり智と眞理とが冥合するなり即身即智と理智契合したるものを報身となす但し法報ともに一應は自覺となれるなり亦應身とは功德和報身所々應現といけり單に智といふにあらず兎に角三身説は大乘に到れば龍樹の時に既に存在せし也之是説が單に論のみにあらずして經にも存在せしに依る即金光明經には分別三身とあり金光明は龍樹の當時存在せしものなり三身とは化身應身法身を指す化身とは隨衆生意隨衆生行隨衆生界悉皆了別不待時不過時所相應時相應行相應説法相應現種々身とあり即ち衆生の機根に應じ形聲の二益を流布せし者にして相應の應を取て之を名くれば應身に當るなり應身とは如實相應如々如々智本願力相應故是身得現具三十二相八十種好頂背圓光とあり即ち應化より見れば應身なれども如々智本願力相應故といふが故に報身に當る也如々とは法性を指す如とは不異一味の謂ひにして大海の水一味なるが如く平等の意なり法界眞如の實体を指す亦如々とは眞實を眞實のまゝに見居るものにして即ち法性眞如なり即ち始めの如々は法にして後の如々は佛なり此法佛契合した る本体の上より下に向つて衆生を化導するが故之を應身と名けしものにして若之を向上的に見る時は報身に當るなり此事は尙六身門によりて此を見る時は一層明白ならん次に法身とは唯有如々如々智是名法身と即ち六身門にては自受用報身に當れるなりされどこれも亦向上的に見る時は如々の智は如々の理に攝せらるゝが故に法身と稱し得べし即ち金光明の法應化の三身は法報應の三身にひとしきことを知る

又攝論に曰く隱名如來藏顯名爲法身就應身中自開爲二化菩薩名報身化二乘名化身とあり如來藏とは眞理が本來のまゝにて顯現せざるを證す法性眞如のことなり此眞如が發動して人格の上に顯れ來つて其丈の妙理を意識するものにさとり上げたるを法身と稱す此點にて人格と非人格との辨別明かならざるは注意すべき點なり概していへば將に人格化せむとせるものといふべきか

報身
應身　報身
化身

梵網經の三身は法身遮那身釋迦身なり像法決疑經と金剛般若經とは法報化の三身なり大論と法華玄義とは遮那身舍那身釋迦身の三身を立つ遮那身とは遍一切處にして即ち法界身のことなり舍那身とは淨滿と稱す即ち淸淨智行理が圓滿せる意なり

り釋迦身とは沃燋と稱す機根の淺深を度するが故なり

此他四身門を立つるものあり法報應化又は法報化等流の四身を立つ

亦六身門を立つるものあり三身の單複二說中複の三身說をとるもの是也

- 法
  - 自性清淨法身
  - 離垢妙極法身
- 報
  - 自受用報身
  - 他受用報身
- 應
  - 勝應身
  - 劣應身

自性清淨法身とは自然本來の性質に清淨の妙理を有せるものにして單に理のこと身とは積聚の意なり此理が人格化するに當つて離垢妙極法身となる煩悶の垢を絕ち迷ひの塵を離れて妙極眞理に達せるものにして莊嚴法身事法身と稱せらるゝもの即ち離垢の結果うつくしく莊嚴せるもの是也萬有すべて莊嚴なりと見萬有が皆冷かならず法身を莊嚴せる即事而眞の謂にして即事に莊嚴を見るなり餘程具体的となれどもいまだ擬人的の佛にあらず次に自受用報身とは果報を化他に用ひずして自ら果報を受けて樂める有樣にして自受法樂なり是が他を敎化する爲に應用する塲合は他受用なり勝應身とは無邊相好神力を有す劣應身とは丈六の身なり三論法相等は勝應身を立て俱舍成實等は丈六の劣應身を立つる也一言にして之を約すれば法とは法爾自然なり報とは報修行身なり應とは應現衆生身なり

而して此六身門は下より上に向つて見る者あり上より下に向つて說く者あり是等の總てを打て一丸としたるものを三身相即論となす此他華嚴の十身無量身等の說明あれども畢竟するに贅辨にすぎず

寂日房御書（つゞき）

本多日生說敎

木村義明筆受

第三　慚耻の心を有つべき事

「彼の樊會、張良、將門、純友といはれたる者は、名ををしむ故にはぢを思ふ故についに臆したることなし、同じはぢなれども今生のはぢはものゝかずならず後生のはぢこそ大切なれ、獄卒奪衣婆懸衣翁が三途河の端にて衣裝を剝ん時を思食して、法華經の道塲へ參り給ふべし、法華經は後生のはぢをかくす衣也經に云裸なる者の衣を得たるが如しと云云、此御本尊こそ冥途の衣裝なれよく〳〵信じ給ふべし。」

凡そ人間と生れて名譽を重せざるものはなく、耻を思はざ

るものはありますまい、是は人間の自然の情であります、昔支那の樊會張良の如き豪傑、我國の將門純友等の如き武士は皆な名譽を重じ耻を厭ふたる故に、曾て臆病の振舞を致したる事がない皆ないさぎよき最後を遂げたるものである、今我國の兵士が皆な壯烈勇猛にして世界に並び無いのも、國家の名譽を重じ日本民族の耻を厭ふ心よりして、勇猛壯烈戰へば必ず勝つと云非常な成蹟を擧るとが出來たのであります、實に人間に名譽を重じ耻を厭ふといふ即ち廉耻の精神を持て居るのは、其人の一生涯をして向上せしめ完成せしむる所以であります、然れども今生の耻は現世一旦の耻で一生六十年を經過すれば夫で消へて仕舞ふのである、有耶無耶の世の人が無茶苦茶の毀譽褒貶を逞ふするのであるからして、左程氣に止るの價値はない、後生の耻こそ最も大事である、後生の耻は因果の規律に照して正明不黨斷然たる處置をされる、其時になつて如何樣に後悔しても最早仕方がない、奪衣婆懸衣翁は三途河の邊りに待受けて、冥途へ來る人の衣服を悉く剝ぎ取てしまうのであります、此を思ふたならば我々は餘程後生の耻を今から恐れて居らねばならぬ、後生の耻を恐れるならば法華經の道塲へ參りて、御題目の信心を勵まなければなりません。「法華經ハ後生ノハヂヲカクス衣也、經ニ云ク裸ナル者ノ衣ヲ得タルガ如シ云云」、と仰せられたのは此であります、法華經の功德は凡夫の煩惱惡業の耻をかくす衣で此衣さへ着て居たならば如何な三途河の翁さん婆さんでも、鐵の棒を持て居る獄卒でも、剝すことは出來ない、イヤ剝すことが出來ないのみならず彼等は直に恐れ入て其處へ平服するでありませう、夫のみでない此法華經の功德と云ふ立派な衣服を身に着けたるものは、貴顯紳士が大禮服を着れば如何な立派な席上へも行かれ宮中の御宴にも列席することを得るが如く、僧侶が法服を着けたる上は如何な立派な處へでもヅン〳〵出られるが如く、靈山淨土へでも寂光淨土へでも自由勝手に行かれるのであります、又た人間は裸体にては外へ出ることは勿論のこと、家の中にても余り体裁のよいものではありません、夫が衣服を着けて居さへすれば少し位垢じみ居ても切れて居ても、何處へでも行かれます、況や立派な衣服を着けたる時は大威張であります。法華經の功德は人間に於ける衣服の如きもので宗敎生活の上に必要欠くべからざるものであります、而かも夫が大層立派な衣服であるから有難いではありませんか。此を思ふと我々は御本尊の信仰こうよく〳〵勵まなければなりますまい、此功德と云ふ立派な衣服は御本尊より我々に授けて下さるので、此功德衣服に依て我々は正明不黨の審判に於て、赤耻をかゝずに濟むのであります

第四　釋迦佛及法華經は妻の如く親の如きものなること、

「男のはだへをかくさゞる女あるべしや、子のさむさをあは

れまざる親あるべしや、釋迦佛法華經はめとをやとの如くましく候ゞ、日蓮をたすけ給ふ事今生の恥をかくし給ふ人也、後生は又日蓮御身のはぢをかくし申すべし、昨日は人の上今日は我身の上なり、花さけばこのみなり嫁の姑となること候ぞ、信心をこたらずして南無妙法蓮華經と唱へ給ふべし、度度の御音信申しつくしがたく候ゞ、此事寂日房くわしくかたり給へ、」

人は情的動物なりと云ふが、全く此人生より人情と云ふものを取去たならば、實に世の中は無味乾燥で樫の木の枯葉をかむが如く、人は全然石瓦の如きものと成てゴッくし、社會は砂漠の樣なものになるであらふ、幸に人間には情と云ふ油の樣にやさしくて而かも火の樣な熱き心があるので、夫より少なからざる慰藉と安樂とを得て、人生に非常な愉快と興味を感するのである、人情の最も能く露れるのは男女の關係と親子の關係である、男女の關係は其人情最も濃くして而かもこまかい、親子の關係は其人情最も深くして而も厚い、子として親の仁慈程有難いものはなく、夫として妻の愛情程嬉いものはありますまい、佛の大慈大悲は恰も妻の愛情の如く親の仁慈の如きものであります、佛は一切衆生を以て自分の子として愛しみ自分の夫として情を送るのであります、今の御文章は其處を喩へたので、最も能く人情を穿ち佛の大慈悲なるものを紹介してあると思ひます、自分の夫が着物がなく外出も出來ないのを、知らぬふりをして居る妻は此世界にありますまい、成るべく立派な身裝をさして人の前へ出したいのは妻たるものゝ情でありませう、子が着物がなくて寒くて感冒を引くのを、見て居る親はありますまい、成るべく暖く成るべく奇麗にして置きたいのは親の情でありませう、今釋迦牟尼佛の大慈大悲も其通りであります、一切衆生の子供達に成るべく煩惱の感冒を引かぬ樣、成るべく夫たる一切衆生をして人中で恥をかゝぬ樣にと、種々と心配を重て下さるのであります、御自我偈の終ひに「毎に自ら此念を爲す、何を以てか衆生をして、無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめん」とあるのは、此大慈大悲の御召食を佛樣は御自身と仰せに成たのであります、我々は此大慈大悲の御情に依て、無明煩惱の丸裸を被ひ貪嗔痴の汚穢き屬をかくし、常樂我淨、金剛不壞の美しき衣服を着けることが出來るのであります、我々は實に人間に生れた甲斐があると思ひます、御經文にある「踊躍歡喜」とは斯る時の我々の心情を言現したものであります、此有難き衣服を我々に御傳へ下さつた日蓮上人は、我等が親しき親、愛らしき妻からの御使であります、我々に取ては實に大事な御方であります、此御使たる日蓮上人に御供養申上ることは、實に名譽であると思ひます、「今生の恥ヲカクシ給フ人」であります、此御使が日本國へ生れて來た爲めに我々は後生の恥をかくすことが出來

るのであります、

皆樣、我々は餘程能く考へねばなりません、我々は受け難き人間の身を受け、値ひ難き法華經に値ひ、修行し難き妙法を修行することを得たのは、前生の善根功德が今生の果報と成て來たのでありますけれども、偏へに御佛の大慈大悲の御計に依るのであります、折角の大慈大悲の御計ひを無にして、三途の河で衣物を剝れる樣なことを爲しては甚だ濟みますまい、イヤ佛樣の方は子に對する親で御心配なさるには違ひないけれども、一旦の罪は御許しになるかも知れませんが現世一旦のみでなく後生一生のみでなく、未來永々二生三生五生十生百千萬億生に渉ての赤恥をかくのが、辛いではありませんか、今日は人の身の上なれども明日は我身の上であります、春花咲けば秋は必ず果實が成ります、年若き花嫁は必ず年老ひたる姑となる時代が來ります、善につけ惡につけ廻る因果の小車は、老幼貴賤を擇びません、聽て我身の上に來て如何に後悔するとも詮ないことであります、努め〳〵信心を怠らず、返へす〴〵も大慈大悲の南無妙法蓮華經を信念し唱へ給ふべし、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經

高橋五郎氏著日蓮論に就いて

醉蝶

讀者よ、余輩をして日蓮論批判を書かざらしめよ、余輩をして此の三文著述に無益の勞力を徒費せざらしめよ、賣らんが爲、買はれんが爲に綴られしものにして同情の之を讀歎するにも非ず嫌惡の之を攻擊するにも非ずして眞面目の研究と熱誠の態度とを欠き唯ひたすらに俗受を主として之に僞基督教徒にあり勝の偏狹陰忍の筆を加へたるかゝる駄著述は所謂默殺に償するものなり、余輩は批評家に非ずと雖も批評家の禮義と價値とを知る、讀者よ、余輩をして文壇の賊五郎と席を同じうせしめざれ、余輩は賊五郎に向つて批評と駁擊とを與ふる丈の愚なる忍耐と愚なる熱心とを有たざるなり、讀者よ、狂犬五郎をして唯徒に月に向つて吠ゆしめ、余輩は余輩として別に專心上人の遺訓と上人の眞價とを發揚するに力しめよ。

讀者よ、馬鹿らしけれども物足らぬ心地のすれば假に一言を試みんか、五郎はこの三文著述によりて上人の一部をも紹介したるに非ずして却て彼自身の陋劣なる心情を披歴し盡して餘すなきものなり、五郎は彼が上人に試みたる誹毀讒謗の筆によりて却て彼自身の基督教徒否宗教徒に非る事を公にし

たるものなり、毛を吹て傷を求むとは實に此の事を云ふか。

讀者よ、戰爭哲學をかき、天人論の批評を試み一年有半の批判を著したる文壇の賊五郎は實に我日蓮上人を以て善巧方便を濫用したるものとなしぬ、讀者よ、彼は先づ上人とスミスとを比較して徐に讀む者の心中に日蓮輕蔑の種を蒔きつゝ更に深密傳によりて之を生長せしめ、別に「法華經は功能書のみ夥だしくして肝心の藥紛失したるが如き觀あるものなり云云」の妄評を引て日蓮の主張したる教義と日蓮の表示したる信仰とに疑惑輕侮の念を起さしめ更に日蓮は此の如き功能書のみの教義宣傳に詭計陰謀ありとあらゆる善巧方便を盡し或は四箇格言を稱へ或は時の幕府に反抗したり、日蓮は宗教家にあらず日蓮は信仰を有し理想を有する者に非ずして實に日蓮は野心滿々たる一世の姦雄なりと論斷し更に彼五郎は深密傳神童章を引て日蓮の幼時既に叛逆の心ありたりと讀者に妄想せしめつゝ彼は大膽にも日蓮は大業を建てんとの野心抑へ難なうして一宗建立の爲に非凡の政治家的天才を振ひ詐欺瞞着によりて愚なる時代を驚かし遂に揚々凱歌を奏したるものなり、日蓮の成功せしは其の教義の秀逸と其の信仰の激深とに基くものに非ずして實によく愚民を欺き得たる詐欺方便の妖術にあるなりとなしぬ、何ぞ其の態度の無禮なる、何ぞ其の讒謗の甚しき、古來幾多の反日蓮的陰險の筆は念佛門徒等によりて試みられたりと雖も未だ曾て此の如き無禮極りなき者は存せざるなり。

讀者よ、彼五郎は實に正當に上人を紹介せず適當に遺書の一部をも引用する事なくして漫に出所怪しき著述をのみ亂用し、日蓮と日蓮宗の歴史とに關して多くを知らざる讀者の腦中に怨し難き疑惑誤解の念を起さしめ、無禮にも上人を以て信仰も理想もなき大山師なりと妄想せしめんと企てたるものなり。

讀者よ、讀者は日蓮論を通讀して一ヶ所たりとも御書の適當なる引用を發見し得たるか、一ヶ所たりとも適當に上人の信仰を紹介せられたるか、人を論ずるに一もその遺書を引かずその信念を示さずして漫に誹毀讒謗の文をのみ擧げその人格を毀く之を批評家として將宗教家としての非義なき態度となす事を得べきか、之を苟も著書を公にするものゝ德義に欠けずと云ふを得べきか、基督教徒高橋五郎氏は實に叙上の如き態度と德義とを以て我日蓮上人を論斷したり、一の確信もなく一の研究も積まずして熱誠の之を敢てせしむるにも非ず悲憤の之を斷行せしむるにも非ずして唯徒に金を得、名を賣り博識を街はんが爲に駄書を亂發する文壇の賊五郎は實に叙上の如き態度と不德とを以て我日蓮上人を論斷したり、之を彼の信仰の正しからざるによるとなすべきか、將之を彼の人格の醜態を披歴し盡したるものとなすべきか、余輩はその撰擇に關しては何れなりとも讀者の判斷に任しおき更に進んで五郎に問訊する所あらんとす。

五郎よ、汝は日蓮に對しはたスミスに對して其の一宗を根立したるは單に「新機軸を出して一世を驚倒したるにありとし」、之に配するに或は狐を使ひ或は詭計を巧にしたる等の下らぬ事實を並べ立てぬ、察するに汝の心事は偏狹陰忍なる僞基督教徒の劣情より日蓮の世にもてはやさるゝを嫉んで大膽にも之を傷けんと試みしものならんが、汝は苟も一宗を建立する程の一大勢か單に山師的手腕のみによりてよく成就し得らるゝとなすか。

五郎よ、汝は深密傳を以て上人第一の旦那富木殿の筆なりとし、幾多無禮なる字句を引用して上人を中傷し誹謗し以て日宗の死命を制するものなりと論斷しつゝ、身延山中に之が辨妄の證據を求めて、而も過去六百年間の日蓮念佛爭論の歴史につきては何の語る所もなかりき、何ぞうの筆の陰險なる汝は宗教家を論ずるの禮義を知らず、書籍を公にするの作法を知らざる者なり、汝は祖師と仰がるゝ程の人には非凡の人格と非凡の威化との存するを忘れたるか、汝は日蓮上人程の威化と勢力とを有したる人の第一の弟子中によく此の如き著述の現はれ來るべしと誠心誠意斷言するを得るか、乞ふ問はん、汝は果して四福音書が基督の直弟子によりて書かれざりし事に關して如何の見解をか有せる。

五郎よ、汝は上人が妙法宣布の爲には如何なる方便手段をも辭せずして、或は詐僞を行ひ或は毀他を敢てし、兵學を收め狐を使ふて一世を瞞着すると共に叛逆をも敢て辞せざりしが如くに讀者を瞞着し去らんとしたるが、汝は信仰の燃え自覺の迸る所かりうめにも方便譎詐の浸入するを許さず、況して劍を帶して自ら護るが如き愚を敢てする者に非る事を知らざるか、汝もし曾て信仰の大なる力を經驗したる事あらば何が故にとくかくの如き惑說を一笑に附し去らざる、汝文壇の賊よ、汝教界の狐よ、汝は我上人の高德を傷け奉るに汲々たる余り遂に自ら僞信徒たるの化の皮を現すを覺らざりしものなり、汝憐むべき者よ!!!。

五郎よ、汝は又奇蹟に關し唱題につき四箇格言に對して幾多陰忍なる讒謗を敢てしたりき、されど水は如何に熱すとも再び冷水に歸るが如く眞に偉大なるものは幾多誹謗の筆も遂に之を毀くる能はざるなり、汝の上人に加へたる千言萬語は實に徒勞にすぎざりき、汝は深密傳以上に出る能はず汝は念佛門徒丈の成功を見る能はずして早くも化の皮を現はし汝の信仰の僞に充ちたる事を露出しぬ、汝が喋々口を極めて日蓮の妖術を說く時汝は愚にも基督の奇蹟に對する汝の見解の誤れるものなることを現はし、汝が喋々口を極めて日蓮の唱題を誹謗し「高妙と兒戲とは相離る一歩のみ」との不當なる譬を引て唱題成佛を迷信に等しと妄斷せんとする時汝は愚にも祈禱に關しはた三位一体に對する汝の見解の確に誤れるものな

る事を披歴して自ら悟らず、又汝が四箇格言を以て漫に一宗根立の方便なりと下す時汝は愚にも使徒派遣と敎團とに對する汝の見解の未だ正當を得ざる者なる事を示しぬ、汝愚なる敎界の狐よ、汝は遂に此の如くにして汝の死期を早めたるなり、汝憐むべき者よ。

五郎よ、汝は又終始一貫して日蓮上人の政略を誇張したるが、汝はイエス、キリストの背後に準備的豫言の存在し、その一代に神の子としての自信と愛との活躍たるを見たる眼を以て而も我日蓮上人に對してのみよく此の如き偏見を敢てしてうこに一の矛盾をも一の背德をも認めざるか。

五郎よ、汝は舊約全書に對して如何の見解をか有せる。

五郎よ、汝は基督の洗禮に關して何等の信仰をか敎へられたる。

五郎よ、汝は約翰傳第八章を何と解したる。

五郎よ、汝は山上の訓戒と使徒派遣とにつきて果して正當なる解釋をもてるか。

五郎よ、汝は十字架臺上に於る主基督の贖罪の血によりて何等の信仰をか喚發し得たる。

五郎よ、汝は實に僞基督敎徒なりと斷言せられて果してよく一言の辨妄をすら試むる事を得るか、汝憐むべき者よ。

基督敎徒にして博學卓見一世に秀づる高橋五郎君足下!!、余輩は足下を呼ぶに相當の敬語を以てせずして文壇の賊敎界の狐なる狂犬五郎よとの傍若無人無禮千萬なる妄語を敢てしぬ、余輩粗野禮に習はずと雖も未だ足下程作法を心得ざる者に非ず、余輩は人を呼ぶに一々相當なる丈の稱呼を知れり、余輩が足下を呼び捨てにしたる所以は足下の不德自ら其の名を恥しめたるに歸因するものにして決して余輩の粗野無作法なる罪に非ざるなり、余輩は實に足下の如き不德義なる著作者の橫行するを憎む者、余輩は未だ社會が足下を死刑に處せざる無制裁の態度について疑惑に堪へざる者なり、五郎君足下!!足下にしてもし後生の恐ろしきを知り世渡りの機微を察せばをゝ少しく反省する所あれ。

日什聖人置文諷誦抄卷上

講師、齡八十老比丘　阪本　日桓　講演
　　增田　聖道　速記

其九

多寶ハ者乘ノ此ノ塔ニ垂レ證明ヲ釋尊ハ者召ノ分身ヲ開ニ塔ノ戸ヲ並ニ二佛塔中ニ唱ヘ付囑有在ト擧ヲ六難九易ヲ求メ末法ノ導師ヲ文　此の四句卅八字は法華經迹門の見寶塔品の大意を述たる文で有ます此内三句廿八字は天台大師の法華經文句の寶塔品長行の御講談の大段三科の分文に依て御書になつたので有ます何となれば初の一句九字は法華文句の分文に一明多寶涌現此の分文に當ります次の一句九字は同く分文に二明分身集來此の分文に當ります第三の一句十字は同く分文に三明釋迦唱募此の分文に當ります第四の一句十字は同く寶塔品の偈頌の御講談の文科の中の第三の分文に明釋迦唱募文の下に廣く六難九易の經文を擧て佛滅度後に法華經の流通を募る分文に當ります依て此の四句卅八字は寶塔品の大意を御書になつたと申したので有ます此より隨文消釋致します多寶者乘此塔垂證明文此の一句九字の中の上の六字は能證の佛を擧げ下の三字は所證の法を擧て釋したので有ます偖多寶如來が妙法蓮華經皆是眞實と證明を垂るゝに就ては證前の寶塔と申して前の法華經迹門の開權顯實の法門を妙法蓮華經皆是眞實と證明を垂るとまた起後の寶塔とて後の法華經本門の開迹顯本の法門を妙法蓮華經皆是眞實と證明を垂ると此の二種の寶塔が有ます其所で此の諷誦章の文面上は證前の寶塔の證明のやうに見へますが開祖の御本意は正く起後本門の寶塔に約して御書になつたので有ます其所以は今の結文に求末法導師と有ます末法の導師は多寶塔中神力別付の本化の大士上行菩薩の再誕我宗祖日蓮大聖人にして起後本門の法華經弘通の導師で有ます爰を以て起後本門の寶塔に約して御書になつた事は何と明了では有ませんか證前の寶塔迹門の法華經弘通の迹化の導師たる天台大師も其內鑑に約すれは起後本門の寶塔が正意で有ます所以は法華文句の六の卷四十九丁に云說ニ迹門近事一未レ用ニ古證一若說ニ本門遠事一必須ニ先證昔一文此の釋の文の意は迹門の始覺近成の佛事を說くには一會の大衆不殘見聞覺知して居る事なれば古佛の多寶如來や十方分身の諸佛の立會にて證據だてするには及ばぬ事で有るが若本門の久遠實成の本地の佛事を說くには一會の大衆の夢にも知らざる大事の法門なれは必ず古佛の多寶如來及び十方分身の諸佛の立會の上にて證據を明に立ねば在世及び滅後の衆生が疑惑を懷て信ぜざる故に立會證明したので有る其時は先昔日說きたる迹門の始覺近成の迹佛所說の開權顯實の妙法から皆是眞實と證明せねばならぬ其子細は此の躰外無得道の迹門の妙法が本門に來至して開迹顯本したる曉には本門躰內の迹の妙法となつて天月の本佛と水月の迹佛と俱に本有の妙法となり三世常住有得道の迹門とならしむるが爲なれは必ず先昔日說きたる躰外の迹門の妙法から皆是眞實と證明せねばならぬといふ釋の意で有ます是れは之れ天台大師の內鑑御本意の釋相で有ます獨天台大師のみにあらず釋尊出世の本懷と古佛の多寶如來の證明と十方分身の諸佛の舌相至梵天の證誠も皆起後本門の法華經開迹顯本の妙法が本懷の佛法で有ますから本化の御弟子方も迹化の御弟子達も起後本門の寶塔の妙法が本懷でなければならぬ道理で有ます「釋尊者召ニ分身一開ニ塔戸一」此の一句九字は寶塔の扉を開く事柄を御書になつたので有ます中に於て上の六字は開塔の來由を明し下の三字は正しく開塔したる文で有ます是より此の一句九字の大意を辯じ

て聽せますが是れは法華經迹門の見寶塔品の長行の爾時大樂說菩薩といふ經の文より下の大段第二の分科に十方分身の諸佛が遠く此の娑婆世界の靈鷲山へ來集したる事を說きたる經文の意を御書になつたので有ます今其經文を取意して大意を辯じますれば既に多寶如來の寶塔が靈鷲山の大地より涌出して天地の中間虛空に住在したるを見て大樂說菩薩と申す人が釋尊の神力を被むり頻に七寶塔の中に在ます多寶如來を拜見し奉りたき心念が發りまして釋尊に願ひ是非とも寶塔の扉を開て中に在ます多寶如來を拜見致させ下されませと申上たれば其時釋尊は大樂說菩薩に告て仰せられますには此の寶塔の中に在ます多寶如來は往昔大誓願を發して申されましたには我が此の佛身を一會の大衆に拜見致させたく思召ならば先づ釋尊の分身たる十方世界に在ます諸佛達を一人も漏さず此所に飯し集め其上にて我が所乘の七寶塔の扉を御開きなされよと約束が有から我今十方世界に住在せる所の分身の諸佛を殘らず此の靈鷲山へ還し集むべしとて其時釋尊は眉間より大白毫の光を放ち給ひて十方各々五百萬億那由他恒河沙の國土に在ます諸佛を召還し集め一度ならず二度ならず三度まで此の娑婆世界の穢土を變じて淸淨ならしめ八方四百萬億那由他の國土に押及したるとき諸佛次第に來集し八方四百萬億那由他の國土に雲霞の如く滿塞たり其時來集の分身の諸佛の各々召連來る待者の菩薩達を釋尊の膝下に遣されて申上させたるやうは十方より來集の諸佛一同に七寶塔を開て多寶如來を見奉ひと與欲し奉りますと申上たれば其時釋尊は右の御指を以て七寶塔の扉を開かせたるとき大音聲を出したる事闘鎗を却て大城の門を開が如く響亘り其時大樂說菩薩を始め一會の大衆一同に久滅度の多寶如來の全身不散の佛身を拜見し奉り時に多寶如來の仰には我は是の法華經を聽聞せんが爲に東方の寶淨世界より遙々此靈鷲山へ參詣したるもので有ると仰せられました其時一會の大衆一同謹聽し奉りましたこれば(取意)是の經文の大意を今の諷誦章に釋尊召二分身一開二塔戸一と御書になつたので有ます凡釋尊一代所說の敎經の中に是の如く大に分身の諸佛を集めさせ給ひたる事は法華經の外前後の諸經の會座に於ては未曾有の事で有ますから天台智者大師は諸大乘敎に對して法華經の最大最勝眞實の經なる旨を節々御稱歎有らせられ我朝の傳敎大師は秀句と申す書物の下卷に多寶分身付囑章と申す章の中に法華經の諸大乘經に超過したる所以を堂々と述て有ます偖開塔戸の三字の辯解は上に於て經文を取意し辯して聽せ且又證前起後の二重の寶塔の事も上に於て天台の釋を引て辯して聽せましたが今一つ辯じ殘したる法門が有ましたるれは證前起後の二重の寶塔には各々表示の有る事で先づ證前の寶塔の表示は釋尊が右の指を以て塔の戸を開きたるは開權の說法を表示致し一會の大衆が一同に多寶如來を拜見し奉りしは顯實の說法を表示したる者で有ます又た起後の寶塔に就ての表示は本佛の釋尊が垂迹たる多寶如來の所乘の寶塔の扉を開きたるは開迹の說法を表示致し靈山一會の大衆が全身不散の久滅度の多寶如來を拜見し奉りたるは顯本の說法を表示致したる者で有ます此等の委細の法門を知らんと思はゞ法華文句の八の卷丁八同く記の文を繙とき一覽すべし

懺悔錄

野茨花生

二、混惑の卷

櫻開き桃笑ひ菫匂ひ菜花薫る。歌ふは雲雀か、舞ふは蝴蝶か。地上の歡樂集め來りてこゝ春陽の天地に滿つ。左すれば花、右すれば歌、往くも、返るも春ならぬはなし。されど迷へる吾には花も月も鳥も蝴蝶も何かせん。天下悉く歌へば歌へ、吾は歸るに家なく宿るに棲家なき不幸落漠の身なり、母の慈愛と妻のなさけとに緣薄きあはれ果敢なの流浪人なり花あるが故に、鳥鳴くが故に、吾は更に深き々々痛苦と寂寞とを覺ふるなれ。知るや、爛熟たる櫻花の美に打たれ恍惚として吾が心花に化するかと思ふ時、愕然醒め來りて吾は宿無の身なるを悟りし時の吾が血を吐く思を!!!。見るや、玲瓏たる鳥の唱歌に心浮立ちて身も世も何處にか去にけん、吾は雲雀と唯二人すみ、吾は雲雀と唯二人天界を味ふ。うの時、うの所、この樂と、この喜との內に醒めての後の痛苦に慄く、吾あるを!!!。吾は天下一の不幸者なり、吾は法に感じ、慈悲に泣く大不幸者なり。感じ、泣くは確信ありてに非ず、希望存してにあらず、迷へるが故になり、宿無きが故なり。宿無の身には樹下石上何れか是に何れか可ならざらん。吾は罪に惱める流浪人あり、安養せん宿もなく休泊せん家もなし。吾には小乘も可なり、大乘も可なり、佛說も可なり、非佛說も可なり、天下何物か可ならざらんや。第一の家を捨てゝの後には、第二第三の衣食等は擇ぶの要なきなり、吾は何物にも肯き、何物にも滿たず、悲哉　悲哉。發して混惑の卷となる。

吾に憂ありて救濟を望む魔あり來り誘ふて曰く、吾が今罪とし吾が今憂とせるは果して誠の罪誠の憂なるか、吾は誤つて雲を陸とし誤つて雪を花とせるに非るか。善とは何ぞ、惡とは何ぞ。人を殺し己を殺すは共に恕し難きの大罪なりと雖も、而も若し戰に出ゝ敵を殺し、國難に殉じて一命を捨てなば世人口を極めて之を賞揚せん。是か、非か。司じく殺人なりと雖も毀譽此の如く異る、奚ぞ人語に之を聞いて善惡を分つを得んや哉。云ふ勿れ、事齊しと雖も其の境によりて是非互に分ると。尊氏に忠なりし師直は天下の叛逆人にして、工匠守に忠なりし良雄は千古の美談となるに非ずや、彼と

此と其の主從の情誼に於て何の差異かある。人人を評するは常に當を期し難し、過去を知らず未來を辨へず、遠きを見ず近きを究めずして、或は是し或は非す。何ぞ其の判別の正を期せん。吾吾を難ずと雖もそは迷見に坐して迷見を立るなり善惡判じ難く動作定め難し、奚ぞ吾が憂の誠の憂にして吾が罪の誠に罪なるを知らん哉。如かず、此の如きの惑見に苦み此の如きの曲直に迷はんよりは、寧ろ進んで快を快とし美を美として心の指導する儘に樂しく一生を送らんにはと。然り一理ありと信ず、唯吾が意に滿たざるを如何にせん。

吾に憂ありて救濟を望む、友來り說いて曰く、吾が罪としわが穢とせるは果していついかなる罪にして何人の責任に歸するか。吾は某の罪を犯し某の害を殘したりとして自ら責め自ら悔ふれども、果して過去の吾と今の吾とは等しき吾なるか。歎くものは何ぞ、罪あるものは何ぞ。變轉極りなく推移限りなき流轉生死の大海に漂ふて、而も我あり彼ありとして過去の過罪に苦むは迷見に非ずして何ぞや。若し橋を過ぎ、過ぎ終りて後に濁水の奔騰するを悟るとも、何ぞ恐懼するに足らんや。若し鏡面の像を捕へてその醜を憂ふ、鏡惡きが爲ならば奚ぞ憂ふるに足らんや。吾が憂とし吾が罪とせるも又々此の如きなり。吾は過ぎ去りし後の橋の危險に慄ける、吾は鏡の惡きが爲に像の醜きを悟らざるものなり。吾の實相を究めず、吾の本体を尋ねずして徒に罪に歎き罪に憂ふるは愚なり迷なり、とくさめて吾の本体に思をこらせと。說き去り說き來る所理あり眞あるが如し、吾は更に進んで彼に聽きぬ。抑も吾とは果して一定の範圍を有てるか。之を肉体につきて考ふるに、食を取り氣を吸ひ、糞を出し氣を吐く。口腔那邊迄食の入り、鼻孔那邊迄氣の去りしを或は自とし或は他とするか。更に之を心靈につきて考ふるに、我が心は周圍に影響をうけ、四邊に感化を與ふるものにして、或る意味に於ては妻の心は夫の心、親の心は子の心なり、家族とは大なる我、時代とは大なる我に非ずして何ぞや。更に吾とは果して一定の恒常を有てるか。かつて鎭守の森に馬の尻尾を弄び餓鬼大將の吾と、今東都の黃塵に處世難を大息する三文詩人の吾とは、果して其の肉に於て、其の心に於て幾何の類同をか存せる。我とは變轉極りなきものなり。時代の風潮を受け社會の感化に動き、他の心と他の考とを集め纏めて、之に若干の秩序と多少の統一とを與へ居るものに過ぎず。本來無一物の極理を悟らずして彼我の別を立て去りし吾に固着す、迷に非ずして何ぞ哉、迷に非ずして何ぞや。此の如き定め難きの責任に迷ひ、自己のものならぬ罪に苦しんで、怏々の內一生を送り、鬱々の內一生を葬らんよりは、如かず、唯現在にのみ責任をおき、唯眼前にのみ義務を定め、義務を義務として履行せんには、之れ生滅の吾の勤に非らん哉と。然り、一理ありと思ふ、唯吾が意に滿たざるを如何にせん。

吾に憂ありて救濟に渴く。學者憐み訓へて曰く、徒に過去の罪過をのみ追ふて現在を忘失するは不可なり。逸したる魚を追はんよりは寧ろ新に數尾を獲べく、去りし小惡を消さんよりは寧ろ新に大善を修すべきに非ずや。吾が過去の過罪は理義に關く情意に放恣なるより生じぬ、吾が今後の行爲は條理に基き理性に導かるべきなり。吾は先づ古今の書を讀み東西の哲理を味ふて人生社會の眞意義を究め、以て自己の立場と自己の本務とを明にし、理性の導く儘に直往邁進すべきなり。此の如くば以て行爲の正規を期すべく以て過去の小惡を購ふを得んかと。然り、一理確にあり、唯未た吾が意に滿たざるを如何にせん。

吾に憂ありて救濟を思ふ。詩人來り說いて曰く、吾は單今の小惡にのみ偏重して過去無數の重障を忘れ、耳目の到る所にのみ注意を限りて更に廣大の舞臺あるを忘ると雖、若し一度眼を閉ぢ正念に住して過去幾億萬劫の我を觀じ來らば、吾は其の惡業の深重なるに驚くと共に、今の憂悶は僅に大海の一沫大地の一粟に過ぎざるを悟らん。之しきの罪や穢に惱んで進取活動の美を失ふは愚なり狹量なり。須く心を轉じ、朝さめては東天に復活の曙光を望み、夕暮れては西空に星の神韻を尋ねて、そこに不言の妙理と不語の天啓とを求め、自然の美に打たれて、吾が妄想を醫し、吾が心膓を洗ふべし。此に於てか初めて憂悶を解くべく、此に於てか初めて懺悔に入らんと。然り、一理あるが如しと雖もいかにせん未だ吾心を轉ずるに足らざるを。

吾に憂ありて救濟に泣く。慈母來り慰めて曰く、吾が罪とし、吾が憂とせるは、そも何をさし何を云ふか。罪とは何ぞ惡人とは何ぞ？。或は先天的罪惡の塊にして惡の爲に惡を行ふ、譬ばイアゴーの如きものあり。或は本性もと善なりと雖も惡に誘はれ惡に迫られて心ならぬ罪に泣く譬ば「澄子」の如きものあり。或は又生後惡習に染み罪惡にみいられて習性となりたるもの、或善或惡心中常に爭鬪を絕たざるもの、理性の輝く時は善、劣情の導く時は惡、善惡の間に浮游して一定の確實なき事恰も風に漂ふ浮藻のうれに等しきもの等枚擧するに暇あらず。同じく罪、等しく惡なりと雖もうの種類實に此の如く異る、罪の本体を究めずして徒に懺悔を叫び、絕望に泣くは惑見に非ずして何ぞや。吾はかつて一度良心の影をひろめ、吾はかつて一度意馬の奔逸せしに驚いて、我が心凡て腐れ果てたりと、絕望し悲痛せるものに非る哉と。更に母は語を更めて曰く、罪惡も汚穢も贖ふて贖はれざるに非ず人にして根本より濁れるならば知らず、人にして全く佛性を燒けるならば知らず。吾が罪、吾が穢、吾に苦痛の念と改悟の情とを起さしむる限りは、うこに尙良心の光あり、うこに尙佛性の存せるなり、今の吾は罪に向へる吾に非ずして罪を出んとせる吾なり。千里の道遠しと雖も一歩々々孳々倦む事

なくんば遂に之を盡すべし、罪惡に染む深しと雖も之を改めんとして念々刻々も忘却せずんば奚ぞ脱せられざるの理あらんや。要は唯吾が心にあり。罪を知り穢を厭ふ迄にこゝ困難は存するなれ、既に醒め來りて惡を出でんとす、何の失望かあらん哉、何の失望かあらん哉。須らく心を靜にして唯將に懺悔を思ふべしと。然り、是なり、是なり。唯未だ我が心の全欲求を滿たし得ざるを惜む。

吾に憂ありて救濟を求む。聖僧來り訓を垂れて曰く、經に曰く

菩薩所行、不レ斷二結使一、不レ住二使海一、觀レ心無レ心
從二顚倒想一起、如レ此想心、從二妄想一起、如二空中風一
無二依止處一、如レ是法相、不レ生不レ沒、何者是罪、
何者是福、我心自空、罪福無レ主、一切法如レ是無、
無レ住無レ壞、如レ是懺悔、觀レ心無レ心、法不レ住二法中一
諸法解脫、滅諦、寂滅諦、如レ是相者、名二大懺悔一、
名二大莊嚴懺悔一、名二無罪相懺悔一、名二破壞心識一、行二此懺悔一
者、身心淸淨、不レ住二法中一、猶如二流水一、念々之
中、得レ見二普賢菩薩及十方佛一

と。業の實相を盡し、罪の本体を究めなば、解脫滅罪の道は自ら明ならんか。眞の吾と假の吾とを定め、常住の吾と假和合の吾とを分ち、無始より無終に渡りて大宇宙に一貫せる一大眞理と、秒々刻々片時も變化止なき無數の妄想とを比照し、無始より無終に渡りて一切無間を知悉し慈愍し愛護し給へる一大圓佛と、無明より無明に來りつゝ三世を知らず十方を知らず、己を知らず他を知らずして夢幻の思ある我等迷見の凡夫とに想到し來らば、うこに、解脫はあり、そこに得道は存するなり。吾は唯將に妄想を去り現在を離れ、吾は唯將に實相を觀じ佛を念ずれば可なり、之れ即ち懺悔なり、之れ即ち解脫なりと。然り、言や善し矣、眞理なり、善法なり。唯吾は未だ如何にして懺悔に入り、如何にして實相を觀じ、如何にして佛慈愍に護助せらるべきやを知らず。悲しい哉。

（續出）

前號正誤（甚しきもの丈）

十七頁、上段、九行「神の啓事」は「神の啓示」の誤
仝　下段、九行「生あり、死ある」は「死あり」の誤
十八頁、上段、十六行「吾流したる毒も」は「毒、」の誤
仝　下段、五行、「汝を毒し、汝を誤りたる」は「汝の毒し、汝の誤りたる」の誤
十九頁、下段、終行、「以て吾罪の」は「以て贖罪の」の誤

此の仙体綫等は凡て本誌の如くなるべかりし筈。句讀は滅茶々々なりき。

不受不施史料（四）

梶木日種

三、寛文法難と悲田新受

身池對論の結果は前述の如く池上方の當事者のみは處分されたが、他の不受主義の者は毫も御咎なく依然角立して、茲に始めて不受不施派と受不施派とが分立したのである、其の上三代公より不受一派に對して更めて政道仁恩の御朱印を下されたから、不受不施一派の勢力は隆々たるものであつた、此の時代に彼の眞迦の破邪記に對して謗迷論、復宗決、同別記格言、本地義等の破書を著はした日遵、日賢、日領等は、孰れも皆不受不施の學僧達であつたのである、之れに反して身延の一派は却て益す世間より指彈されたから、彌よ不受一派を嫉視し四代家綱公の代替を機として、復た延山より不受一派を讒訴した、依て平賀日誠、小湊日晴、碑文谷日運より「地子寺領は、四恩の中には第三國主の恩、三田の中には悲田にて世間の仁恩に御坐候、故に拜領仕候」云云と訴狀を捧げた、これは萬治元年八月九日附であつて、由來身延一派は身池對論の頃より地子寺領は共に供養だと主張したものであるが、全體公儀は法華宗歸依の檀那でもなければ、又布施として賜はつたものでもない、即ち地子寺領は敬田供養でないから四恩の中には國主の恩、三田の中には悲田であつて世間の仁恩だと辯疏したのである、うこで身延は更に地子寺領は公儀より三寶崇敬の御供養として賜はるとの命令を發せられんとを時の寺社奉行加賀瓜甲斐守に請托した、この謀計は遂に成功して寛文五年に至り公儀より諸宗一般に寺領ある寺へ對して「今までは寺領を仁恩の爲めに下されたが、今より後は三寶への供養として下さるから、其の手形を致すべし」と達せられた、この命令は他宗に於ては別に異義はない、又法華宗の中でも受不施派は固より主謀者であるから異義のあるべき筈はない、只獨り不受不施一派に取つてはこの命令こそ實に重大な難問題であつたのである、その故は凡う寺領（並に地子）は別體が有るから、能施の人の心により供養ともなり、仁恩ともなるので、即ち能施の人が三寶崇敬の義ならば供養となるし、能施の人仁恩とあらば世間通用の政道となるので、この度は明かに三寶供養と定められたのであるから、若しこれを受ければ忽ちに宗義が破れるから誠に受け難い、若しこれを受けなければ上意違背の義でなくても、れのづから違背に似る譯であるから、不受一派は實に進退維れ谷まつたのである、尤もこの命令が公然と發表されるに先だち、其の年七月末つ方に「三寶供養の御朱印手形致し頂戴せよ」と不受不施派に内命が下つた、依て早速八月二日に市ケ谷自證寺に於て、同十二日は三田大乘寺に於て諸山の衆徒が會議を催ほした、又同月十九日には久世大和守より三談所の能化を呼

出し池上日詔の例を引て書き物せよと勸められた。三談所の能化と云ふは下總の野呂妙興寺日講（錄内啓蒙の著者で今の講門の派祖）玉作蓮華寺日浣及び松鯏妙講寺日瑤である、その時日講即座に「日詔の書き物は已に一宗の瑕瑾なり」と辯明して一同承諾しなかつた、同月二十一日には谷中威應寺に於て第三回の會議を開いた、この時碑文谷日禪は麁惡の言を出して衆を二分せんとしたが、平賀日述が調停して事無く濟んだ、この時久世和州へ返答すべき使者に日禪が選ばれたが彼は辭退した、然るに翌二十二日當宗勝劣方一同が寺社奉行へ出でゝ「今度御朱印頂戴仕候儀御供養と奉存候、不受不施の心得とは各別にて御坐候」と云ふ文言の書き物を捧げたとを聞いて日禪は、急に和州への使となるとを承諾したから、二十三日に日浣と共に同行して和州へ「兎角書き物なる間敷義」返答をしたが、うの折日禪が和州に耳語したから氣味惡しと日浣が歸ッて同志に語ッた、和州の話では八月中に埒明くとのとてあり、又一派内に異義さへなくば無事に事濟みとなるべく、若し異義あらば危ふしといふ内意も他より傳へられた　幸にして八九兩月中無事に經過したから日講日浣等は十月上旬夫々歸林した、然るに小湊の日明は御朱印を取らぬとを本意なく思ふて悲田供養の名を以て御朱印を受けやうと企て、又谷中の日純は書き物をして不受不施を立てやうと運動したから、十月末に至て書き物の事が再發して勝劣方の如き書き物にて濟ます首尾となり、日明の悲田供養はこれが爲め沙汰止みとなッた、是に依て再び日講日浣等は出府して諸寺の間に奔走し、八月中議定の通り異體同心に覺悟するやう促がしたから、日禪日純も表面は流罪の覺悟で本尊等を認めて檀家に與へるなぞの狀態であッた、そこで日講日浣等協議を遂げ、止むなくんば上野の宮を賴み施主を立て御朱印を申受ける策を案じ、谷中日純等も之れに同意してうの運に掛ッて居る内に、十一月初旬加賀爪甲斐守より平賀碑文谷を呼出して無味に書き物せよと云ふとになり、又日明は小湊より歸府して和州へ悲田供養のとを請願したが承引せられず、處へ計らずも書き物して不受を立てさせる望みは粗ぼ調ふたといふ通知が平賀碑文谷兩名に宛てゝ到來した、之れより先き平賀日述は明純禪の三人が密かに悲田供養の訴訟を起した證跡を認めたが、この通知を得て彌よ彼等三人の隱謀詐惑が明白となッたから、日述日講日浣等は彼等三人に對して其の變節を誡めた、されど到底改心の見込がないので止むなく二派に分離するとなつた、即ち一派内に異義あらば危しといふ内意に當つて來たのである　うして其筋よりは却て日述方に對して書き物して不受を立てよと促がして來たこれは手形の文言に慈悲の二字を入れたならば日述も同意するし、一派中異義なく書き物をすると云ひ拵らへて日明等が訴へた爲めに、久世和州が斡旋して「公儀より三寶供養と仰

渡さるゝ上は下にて如何樣に名を付けて受くるとも彼の儘にせよ、少も公儀の三寶供養の御仕置の障りにはならざる事なりと、評定一決したからして、書き物して不受を許すとなり、隨て日述方に對して書き物を促がすとになつたのである又此の時兩者の中に這入て調停を試みた僧衆もあつたが日述方は終始強硬で押通したのである

さて十一月二十二日には小湊、碑文谷等が寺社奉行へ出て手形を書いて出ず、翌二十三日には小松原、谷中、村田妙法寺代、依智妙純寺等が同じく手形を書いたが、うの時上總興津妙覺寺日堯、武州曾司ヶ谷法明寺日了の兩僧は手形の文句が此度御朱印頂戴仕候義難有御慈悲にて御坐候地子寺領悉御供養と奉存候

と、あつたから、この文體では宗義に違背するから書けないと斷つて歸つて、かくて極月四日（寛文五年也）寺社奉行加賀爪甲州より平賀本土寺日述、大野法蓮寺日完、並に日堯日了を召喚して「此の度三寶供養の手形致さゞる事上意違背の義に罷成間御預に仰付らる」と申渡し、日述日完を伊豫國吉田の領主伊達宮内少輔へ、日堯日了は讃岐丸龜の領主京極百助へ御預けとなり、同月十日には谷中等の三ヶ寺は無事に御朱印を頂戴した

次て三談所の能化も度々召喚されて取調を受けたが、談林には寺領がないから不問に措かれるとなり、翌年二月日講は一旦野呂へ歸林した、この時日講は破奠記を著はして身延日奠が受不施の邪義を書き立てたる宜道の十六ヶ條を破拆した凡そ受不受の宗義を研究するには不受の論書としては、この破奠記と奥師の守護正義論、宗義制法論、禁斷謗施論、及び小湊日遵の不受決、又新受破斥の分では日講の破鳥鼠論、三田問答詰難などは必讀の要書であり（因曰不受の總ての要書か後に日講が編纂して萬代龜鏡錄と名く、大本六卷あり、絶版ざるも爲め現存するも少し今）又不受不施の方は破奥記、宜道十六ヶ條及び了義日達の受不受決疑抄等である、彼此對照すると双方共時代と共に議論が進んで居るが、特に受の方では乾遠時代と日奠以後とを比べて見るに矛盾があり相違あるとが認められる、

さて又三月下旬に至り谷中等の三箇寺が三談所に反抗して日講等にも手形を書かせやうと運動し始めた、前に一寸述べた如く此の度の詮議は寺領なき寺は御搆のない筈だのに、手形の文言中に地子の二字を加へてあつたとを聞いた時已に日講は談林をても駈り出すかと想察して居つたが、案に違はず卯月には日講等が再調を受けるとなり、終に寛文六年五月二十八日寺社奉行より上意違背として御預け仰渡され、去年ならば同じ並もあれど再返なる故遠所へ仰付らるとて、野呂日講は日向國佐土原島津飛驒守へ、玉作日浣は肥後國求麻相良遠江守へ御預けとなつたのである、此の折日講は守正護國章と題して一卷の諫狀を提出したが、彼の松鯏の日瑤は遂に

三箇寺と一味になつて手形を書くに至つた、かくして不受一派中の清僧は夫々處分されたから、身延よりは訴訟して不受の明き寺を末寺にするし、奉行甲斐守は上申して「不受不施の一流は公儀違背の宗旨たる故に天下一同滅亡」と評決したから、餘類は續々處分されるようとなつた、この法難で不受不施は表面全滅したのである、丁度大佛事件の起つた年よりこの寛文六年までは七十一年、身池對論よりは三十七年後に當つて居る、この時の落書に

不受不施の理を曲物にするとも、皆檜物屋の細工なりけり

（碑文谷日禪の事）

日明が臆病がみの書き物は、手形がた〳〵足もがた〳〵

（小湊日明の事）

加賀爪にかき破ぶられし法華宗いたやかいやといふは不受不施

（甲斐守の事）

この不受不施全滅の法難は身延と甲斐守と結托して遂行したのではあるが（甲斐守は私曲擅横であつたから、後に水府公に斬殺されて跡は斷ちたのである）この時若しも不受一派中に臆病で理を曲げ利慾に迷ふた明純禪の如き輩がなく、終始一致團結して進退を倶にしたならば、或はかく全滅の否運にまでは陷らなかつたであらうかと思はれる、この法難が宗門に及ぼした厄害を察するに、不受一派の寺院は大低身延が占領したから外形上は左程衰頽しなかつたが、宗外より受けた侮蔑と、宗門の精神的被害とは誠に名狀し得られぬとで、實に慨嘆の極みである、而かも其の起因が全く内訌であるから吾人は宜しく之れに鑒みて、かゝる不祥な歴史を復び繰り返へさぬやうに十分警戒し、庶幾くは一日も早く宗内各派の統一を遂げ以て速に四海歸妙の淨業を大成せねばならぬ、

さても小湊谷中碑文谷の三箇寺は前述の如く手形の文言中に慈悲の二字を入れ公儀を掠めて御朱印を受けたが、表面は矢張不受に見せ掛けて檀信徒の輿望を繋いで居つたから、幕府及び古受身延方では尚ほ不受者流だと認めて居たが、實際は受不施と異ならぬ邪義の新流であつたのである、彼等は三田問答といふ邪書を著はして悲田供養の義を主張し、慈悲の二字を入れたる上は別時の敬田供養は受けぬ證據となると云ひ拵へた、これが即ち新受悲田宗である、

此の悲田日明等が繁昌の折に江戸の藝州下屋鋪に居つた不受の僧一樹院日堯等は、日明等を恐れて和睦を申込み相互に施物等の取り遣りをしやうと内約して、藝州侯の母堂自昌院を掠め日明等と通用せしひるをに取計ふた、此の自昌院といふは家綱公の姉君で大の下受信者であつたから、寛文九年の夏日明等は自昌院へ三箇條の書き物を提出して改悔の印とし、其の上青山龍土の番神に參詣して事相の改悔を勤めた、その三箇條の内に

一、往々公儀へ訴へ慈悲の一札取返すべき事

一、流人御赦免の訴を三寺より肝煎の事

と云ふ箇條を認めた、處が兩三日經つてから彼等は「右の事檀那へ聞へ、さては流人衆こそ正義なれ、三箇寺へは參詣を止めんと申者多數あり、今更迷惑に及ぶ間憐み御返しあれ」と申立て自昌院より書き物を取返した、これ等の詐惑が日向の日講に聞へたから、日講は破文を認めて自昌院に不通の旨を申送つた、自昌院は尚ほ施主を立てゝなりとも日講と通用をしやうと望まれたが、一樹院が江戸中に施主に立つべきものは一人もないと僞つたから遂に不通に成り了つた、實はこの自昌院の肝煎によつて日講は藝州へ預け替になるとに取運ばれつゝあつたのであるが、かゝる次第ぢうの事は見合せになつたのである、

かくて延寶八年五月八日四代嚴有院殿薨去の法會の折に悲田宗の徒も上野の諷經を勤めたが、一言の辭退もなく布施五十貫拜領したから、前に慈悲の二字を手形に入れた以上は別時の供養は受けぬ證となるといふたとは全く虚妄となつた、ろうこて古受の身延日逵池上日現より悲田の邪義なるとを屢ば訴へた結果、遂に元祿四年四月二十八日評定所に於て「近年悲田宗の新義、今般上意に依て永く滅却之條、一同受不施に歸伏すべし」と申渡された三箇寺は天台宗に改宗し度と申立たが許されなかつたから、彼等新受の徒は熊野午王の裏へ血判を加へ起請文を書いて身延に歸伏し、剌へ末寺を掠め「意業にも不受不施を存間敷」との起請文を徴收して一同古受に降伏した、此の時より碑文谷法華寺と谷中威應寺は天台宗に屬したので、今の谷中の天王寺は即ち威應寺の改名である、寛文五年悲田建立より茲に至つて二十七年新受は遂に全滅したのである、次には不受の分派、内信者の狀態等を述べやう

新しき龍女

（この小編を未見の少女に献ず）

ひらさき

○若し世の中に受くべからざる恩義に甘んじ救ふべからざる憐愍を漫にする徒輩のあらば人は之を何と評するだらう、金と權力とが横行し、なまぬるき腐敗の氣が充ち滿ちた現社會では彼が賤むべき情死に誤つて同情の聲を擧げる樣に、或は道ならぬ冥助や義に合はぬ恩澤に賞贊の病見を立てるかも知れないが、曾て武士道の盛に日本主義の汪溢せし時代には一舉一動一取一捨凡て義によつて行はれ意氣に從つて進退せられたもので時には可愛き妻子の眼前に非命の最期を遂げるのをも見殺にし、又時には一片の誓約の爲に幾萬の生靈と一國の城邑とを犧牲にせられたのを思へば、せめて時代の指導者たるべき宗教家の間丈にでも義理名分の重せられ道ならぬ冥助の排斥せられん事を余輩は切望に堪へないのである。

○道ならぬ冥助とは果して何を指すか。諸君よ、もしこゝに盗賊があり之に刑の恐るべきを示して改心とか救助とかを喋

喋する者があるとすれば、諸君は之を何と思ふだらうか、人が罪惡を犯して後生の恐しさに佛信心神いぢりを初めたとすればどうだ。「悔ひよ改めよ天國は近づけり」と絶叫しつゝ佛性を說かず吾を說明せずして唯漫に罪と神とを呈出する者や四十八願を說き西方淨土をふりかざして無闇に慈悲の投賣をする念佛門徒等の信仰は或はこの盜賊の譬に類しはしまいか、余輩は此の如き信仰を道ならぬ冥助を祈る者となすのである。

○が、然らば美しき信仰とはどんなものであらうか、余は左に余が泣かせられた少女の美しき信仰の書狀中に現れたのを諸君に紹介して判斷を乞ふ事にしやう。

前略　私は此度津山小學校を卒業致しました、私は顯本法華宗の信者で三寶樣の御かげや御上人樣の御敎訓によりましていつも優等生にて及第致しましたが此の度も亦幸に優等生にて御褒美に硯と硯箱とを頂戴致しました、三寶樣の御蔭で身体も健かに精勵しましたので賞與を頂きましたのでせう、あまりのうれしさに此の頂戴の硯ではじめて書いて御禮を申上ます、……婦人會も追々盛になりました、私は何も知りませんが、これからは一層奮發して私の信心の決定して居る御話をしようと考へて居ます、かへすがへすも御身御大切に御布敎遊ばさるゝ事をひとへに祈り上げます、

此の手紙はかつて經師の壺陽をうけた由緒ある信者の家から生み出されたので師と賴む上人の近頃東都に敎筵を布かるゝに、學校卒業の喜を告げこしたものである、余は多辯を費さないが少女の邪氣なき喜悅の內に如何に信仰の溢れ謝恩のみちみちて居るかを見、又其の精勵によつて得た賞與をわがものとせずにうこに直ちに佛恩の忝なさと報恩の誠心とを起して筆をとつて書初にこの謝恩の手紙を認め來したのと、物の理屈は知らぬがわが信念によりて我は尊き如來使の職務を帶ぶべきであると自覺して信仰の決定せる話を述べやうと云ひ更に上人の布敎をすゝめこしたのを見てわれはこの少女によりて現された信仰の美しき威力に打たれて思はずわつと泣き伏したのであつた。

○なんと美しい話ではないか、諸君は此の一片の手紙によつてそこにどれ程の眞理が現されて居ると思ふ？。と之が實に一念三千の深奧なる敎義と久遠實成の高遠なる佛慈悲との平易にかみくだかれて幼稚なる少女の胸中に萠芽たものである事を思へば余は今更の樣に根底なき信仰の如何に眞の敎と異つて居るかを深く〳〵感ずるものである。

○讀者諸君よ、諸君の內には一度誠の信仰を有したのに惜哉惡魔の誘ふに敗れたものもあり、又果報拙くして、未だ妙法の功德に接し得ない者もあるだらうが、願くは眞面目に子細にこの一片の書狀を味ふて其の內に包まれたる深遠なる敎訓

にうたれ、余と同じく泣いて佛恩の忝けなさに感謝の紅涙を流されん事を余輩は切望する者である。

終に佛恩の忝けなさを謝し、並せて少女の將來を祝す。

南無釋迦牟尼佛（二）

野茨花生

追懷

夕、斷崖に坐して遠く望めば
火影點々、地上に星あり。
市に飢ゑたるかたゐ子が
打たれて、蹴られて、罵られて、
肉も心も渴き果て
身も魂魄も傷きつ、
疲足臭骸を運ぶに由なうして
泣いて樹陰に身を伏せば、
日は西山に沈み果て
餘光も野邊に跡たゐつ。
暮れ行く空のうす霞
萩の葉末に露ゑ散るなる。

悲しや悲しや御佛の
かくれて給ふて今こゝに
三千年の世は闇や
群星互に時めいて
八宗九宗と競ひ立つ、
何れ劣らぬ花菖蒲
いとゞ心の迷はれて
悲願の岸に橋たゐぬ。

日は西山に隱るとも
朝、再びひんがしに
花は嵐に吹き散るも
後に木の果の殘るあり。
諸行無常と傳ふれど
曾て無常は存せぬを。
沙羅雙林の華散りて
佛滅し給ふと見しも
三千年の今も尙
佛は誠在ぬにや。

日は西山に沈み果て
餘光も野邊に跡たゐつ。
『父上いづこ、我家どこ
飢ゑて渴きてかたゐ子が
なさけの宿に歸り來ぬ
父上いづこ、我家どこ。』
日は暮れはてつ、世は闇の
いづれをうれと、かたゐ子が
たどりつかれて孤り泣く。

余は如何にして信仰に入りたるか

一　太

一、

一寸に充たざる肉眼、數里に限れる眼界、闇を見ず陰を見ず過去を知らず未來を測らざる此の一小肉眼を以て廣漠極りなき大宇宙と變幻測り難き大人生との至極至微を究めむと欲するは譬ば石を絞りて水を得土を堀りて地心に達せむとするに等しきなり、たとひ幾億星霜を經とも宇宙の廣漠は依然として廣漠に人生の幽玄は依然として幽玄に終らむか、余は物心の二元を弄して唯徒に此の一大難問解決の任に當らんとせる哲學者流一輩の大膽に驚くと共に其の迂愚に憐愍の情を禁じ得ざる者なり。

二、

試に街頭に立つ事五分時なれ、或は口邊美髯を蓄へ絹帽を戴き美衣美服を纏うて揚々馬車を驅る貴族あり。或は蓬頭弊衣、足は露に腰は破れし貧に惱める病驅の路傍に横りて憐を乞ふあり、世は千差萬別の洋服羽織、半纏法被、筒袖振袖、前垂袴、靴下駄草履、絹毛織木綿等、富める貧しき、幸不幸それ〴〵分に應じて雜然錯然とこゝに一大活パノラマを現出せむ。

此等幾多の差違不均一は果して何によりて起りし哉。

三、

又双眼を閉ぢて冥想する事少時なれ、或は生來に犯せし幾多無數の罪惡は鉾を並べ刄を磨して憤然と問罪の軍を起し爲に頃刻の安慰をも得難き事あり、或は又過去に積み上げし善行良爲は笑をたゝへ賛辭をもたらして靄然と平和の宴を張り爲に限りなき愉快を感ずる事あり、思は千々に分れて、失敗に溺れる消沈となり失戀に泣ける悲痛となり名譽の心となり高慢の情となり、慈悲嫉妬、憤怨憐愍、快樂慰安、空想憤激等幾多無數の情緒となりて漫然漠然とこゝに一大詩篇を作出せむ。

此等幾多の相違せる情緒は果して那邊より來りし哉。

四、

同じく人なり、等しく天惠を頒ち生命を享有せる人なりと雖も而も之に無量の差違あること恰も人々その面の相同じからざるが如し、或は生れながらにして幸福なるあり、或は老後不幸に沈淪せし者あり、或は又双眼を具へしあり片眼を欠けるあり、生盲なる病盲なる、聰なる聾なる、啞なる咄なる、賢愚快苦、圓滿不具等幾多無數の差等あり。

此等無數の差等は果して何物によりて生せし哉。

五、

吾人は何故に此の如き苦痛に充ち活動に欠けたる人界に生れたる、何故に更に平和に更に完全なる者として生を享けざりし、禽獸蟲魚は何故に吾人よりも更に苦痛に更に不完全なるものとして生存せる。

造化は不公平を敢てするものか、天惠は好惡を恣にするものか。

此等の不等矛盾は果して何等の理法によりて然る哉。

六、

余は因果律の存在を認む。

余は遙に信仰の微語くを聞く。

七、

余は一日「オルレアンの少女」を讀みぬ。

勝ち誇りたる英軍を破りて將に倒れんとせし佛の王朝を磐石の安きに定めたる女英雄ヂアン、ダークが敵の敗將を窮追して將に其の頭を斬らむとするに當り四の星眸相合して閃光互にひらめく所、彼女の劍は鈍りぬ、彼女の魂は融けぬ、彼女の決心は弛みぬ、彼女の誓は破れぬ、遂に仇敵を斬る能はず、遂に偉功を全うする能はず。疑はれ讒せられ罵られ迫害せられ追放せられて其の末路を誤りぬ。

彼女の決心を鈍らせたるものは何ぞ哉、彼女の眼を射たるものは何ぞ哉、四の星眸を通じて此の偉大なる作用を敢てしたるものは果して何物ぞ哉。

八、

余はワグネルに於ても同じ事をきゝぬ、近松に於ても等しき事を讀みぬ、ハイネ、イブセン源氏春水等に於ても同一の事を聞かされぬ。

情とは何ぞ哉、戀とは何ぞ哉、愛を起し怨を起し喜を起し怒を起すものは果して何物ぞ哉。

九、

夢の解し難き情の限りなき智の不可思議なる、記臆良心、分別判斷、憎惡、愛戀等此等の凡ては果して何物の起し何物の然らしむる所ぞ。

煩悶とは何ぞ哉、喜怒とは何ぞ哉、純朴邪氣とは果して何物ぞ哉。

余は此等の問題を解決すべき理法を求む。

十、

人は細胞の集合物なりと、人は元素の組成せるものなりと果して然るか、果して然るか。人とは鑛物植物等の稍精巧なる物に過ぎざるか。

誰か云はむ、一個の細胞に於て玄妙なる智情意を具有せりと、誰か想はむ、單に元素のみを集めて精微なる活物を創成し得べしと。

若し人にして果して細胞の集合し元素の組成せるものならば

ば何によりてか、よく、喜怒哀樂等の七情を具し考慮判斷分別記臆等の智意を具へ、靈妙不可思議なる活動をなすを得べき、見ずや、等しく細胞の集合し元素の組成せるてふ死植物と活吾人との間に横りて鳥も超へ難き一大ガッッと一大差別との動かし難きを。

人にして情を有し智を有し意を有する以上、單原素のみを集めて簡單なる活物をすらも作り得ざる以上は余は何と辨せられても唯物論者に傾聽する能はざるなり。

十一、

余は靈魂の存在を信ず。

余は哲學を捨て科學を去つて認識以上に何者かを求めむと欲す、余は杳かに信仰の微笑むを見る。

十二、

吾人は果して生を以て初り死を以て終るものなる哉。

過去とは生後二十幾年の短歳月に過ぎず未來とは死に至る二十幾年の少日月に過ぎずして吾人の存在は僅に五十年に充たざるものなるか。遊魂五体を離れ魂魄天地に歸りて吾人の肉体は灰となり吾人の言動は空文に殘るのみ、吾人は茶吡一片の煙と共に未來永劫に消滅し去るものなるか、吾人の犯したる罪惡、吾人の敢てしたる不德は實に七十五日てふ人の噂に殘るのみ、吾人の起したる同情、吾人の勤めたる善行も亦單に空文空碑の上のみによりて酬はるゝに過ぎざるか。

十三、

既に因果律を認め靈魂の存在を信ずる以上は余は何と欺かれても此の不法不理を認諾し得ざるなり。

十四、

一片の灰燼一個の塵埃も尙物質の非增非滅を語り、杳たる電光、渺たる音色も尙勢力の不生不滅を說けるに而も此の靈妙不可思議なる靈魂にのみ生滅を許さんとし、又一小事物、一小現象にも尙因由を說いて其の偶然を否みつゝも而も此の幽玄不測なる人生にのみ必然を拒み因果を五十年に制限んせとするは偏見に非ずして何ぞや。

双眼を閉ぢ口耳を休め冷靜無想の地に立ちて心眼を以て吾人の過去無量億劫の越方と未來微塵數劫の行末とにつきて誠心誠意觀念する所あらば幽冥の中何者かの吾人の心耳に細語くを聞かむ。

十五、

余は靈魂の不生不滅を信ず。

十六、

余は吾人の無始を信じ余は吾人の盡未來世を信ず。

余は信仰の誘ふを感じ、余は宗教の招くを覺ふ。

十七、

佛世に在さゝるか、余は佛の愛子ならざるか。

謹んて經文を拜し奉るに余は理智悲圓滿の佛陀が我等迷

へる者を救はんとして念々刻々も忘過し給はざるを敎へらる曰く我亦爲世父救諸苦患者と、又曰く每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身と。

佛は我等を欺き給ふ者か、經文は僞を傳ふる者か。

十八、

過去無量億劫の去りし生涯は如何に過せし哉、未來微塵數劫の長き行末は如何になるべき哉。

余は余等が下にも尙幾多の憐れなる苦の生涯を見、余等が上にも亦限りなき光明の智の國土を認む。

余は余が胸中に無量の邪念の存在するを否む能はず又無邊の善意の輝くをも信じ得る者なり。

十九、

果して余が過去の越方は正しき穢なきものなりしや。

余が未來の行末は希望溢るゝ光明のものなるや。

二十、

余はわが越方を思ふと共に過去無量億劫の罪過迷妄の苦痛は俄然としてわが全身に一大刺戟を與へ、又わが行末を慮ると共に未來微塵數劫の臭穢闇黑の非運は忽然としてわが心性に一大苦痛を與へざる事なし。

今迄の苦痛も激しかりしが、今後の苦痛も堪へ難くやあらなん、但に五十年に非ず、單に人の苦に非ざるなり、嗚呼余は狂死せざるを怪む、余は懺悔憤怨の思に堪へず、余は救濟を求め余は惠光に渴く。

二十一、

何物かよく余を救ふ物ゾ、何者かよく余を救ふ者ぞ

二十二、

心靜かに業の實相を尋ね、我の本体を觀ずるに、迷を起し理を遮るものは肉の心と肉の身とに非るなきか、曾て我は聖者の訓を受けし事の幾度かありしならんに我見偏執の思強く假の我を捨て難なうして遂に聖道に入る能はざりしならんが今も亦我は妙法の藥に病苦を逃れ得べくして而も虛狂の思深く肉の心に遮られて遂に佛道に入り得ざる者ならんか、此の如くばいつの日かよく生死の苦縛を斷じ實相の光明に照されうべき、あな恐しとも恐し、余は速に無明を去り生死を斷じ、余は速に虛狂を捨て實相を究めざるべからず。

二十三、

佛は我等を憐みて十如是の妙訓を垂れ給ひ、天台と日蓮とは之を開して理の一念三千と事の一念三千とを示し給ひぬ、我と佛とは本來別物に非ず實相に異るに非ずして唯無明に遮られ、眞理に輝されざるが故に永く生死の海に漂へるのみ、元佛子なり、王の子が誤つて身を卑賤に下せるなり、法界には佛と佛子とのみ存す、我は唯本來の正位に歸れば可なり、迷を去り無明を除いて釋然大悟し來る所、吾人の當体は其の儘に佛、吾人の國土は其の儘に淨土ならんか、我と佛との關

係は手の表裏波の起伏の如し矣。

二十四、

吾は吾人が佛の子なる事を知り、佛が衆生の父なる事を知りぬ、身には慈悲惠光のなさけの雨の沛然として被ひかゝれるを覺ふ。

二十五、

吾は佛の大慈大悲に抱かれぬ、罪もなく福もなし、限りなき歡喜と、極りなき謝恩とを覺ふ、今迄は識域に上らで見逃にせし幾多無量の情智の恰も朝暾東天に上りて滿地の白露金光に輝くが如く、又一陽來復して百花一時に咲き出づるが如くに佛の智慧と佛の慧光とに輝らされて吾は全く新しき生涯に入りぬ、吾は眞の人生と眞の宇宙とを解し得たり、永き迷霧は晴れ永き我見は除き去られて、吾は恰も雨後晴天に對するの思あり、喜ばしい哉、喜ばしい哉、謹てこゝに

とわに我等が上に輝き給へる理智悲圓滿の一大本佛の大慈大悲の御德を感謝し奉る。

南無妙法蓮華經

三上氏の第二信

一奉公の其後の無沙汰多謝々々自分目今戰地に在りて悲慘夫れ分相盡し居り候御深知の如く戰後の光景みなとては更に無之候へ凄愴にして我等の慰籍となるものの趣なきに非ず候ども其の殺伐なる血塵の內自らに詩的文才なきもの之を謳ふによしなく唯小生が大兄さは通報すべき事項は日本基督教青年同盟會の行動に有之候同會は大連の市街に中央に設立せられその嚴堂にて宏壯にし設備の完全せる眞に驚嘆なる外なく候そ入れば會員いとも可嘗懇切に誘なふて茶菓を饗しの慰堂に籍の辭をあたへ內地發行の新聞雜誌の供へつけ基あり其他の遊戲物あり且つ加ふるに戰地にたける不足をつげてこゝより居る封筒紙等を銘々に寄贈しそうして短時間なるも尤も熱誠をもつて神の福音の尊き所以御力の無限絕待なる所以を獲せしめ居るを相認めよりし安堵の地位を獲せしめ居るを相認めよりし慰めつて同會の態度は眞に兄弟に對する有之候さが如く一心般の基敎に感じて居る思想は稍や同化せられて少なれば厚意に感れけ準信者たるの資格に在るを相認めと其厚意に感ーの此の市街が奈かに彼敎の督敎の指導感化を享ふる所なくんの身を敎するもの少しく考へ思はば無之候僕は大にあり がたく思ひ候大兄よ例の雄飛の健筆によりて戰地慰問所設立の議を鳴らして活動の舞臺をつくり給ふてはいかゞなるや御宗團にれいては大兄の力によりて動くもの と推考仕候兎に角右の擧を企て相成候樣御すゝめ申上候戰中多忙亂筆御推讀下され候はゞ統一御送り下され候は難有存候

左樣なら失禮

雜報

▲顯本法華宗管長公撰　妖雲漲り紛擾劇甚の爲め久しく管長の空位を生せし顯本法華宗は學德兼備にして敏腕家の聞へ高き本多日生大僧正の管長事務取扱として諸般の施設其宜しきを得整理の實現はれて魑魅魍魎全く其跡を絕ちしものから本月二日を以て後任管長の選擧を昔く全國門末の有權者に令達し十六日午前八時を以て之が開票を執行せしに其結果左の如く

有權者惣數四〇八
內棄權者八十六
投票總數三百二十二票
內有効三百十票　本多日生師
無効十二票

本多大僧正の獨占にて未曾有の大多數を以て當撰の名譽を得られたり開票全く終りしは午前十一時過にて投票監督山根顯道は直ちに審査書を作成して立會諸師の捺印を需め折柄名古屋の戰死者追吊會に臨席中の本多猊下に打電して其承諾を要請し宗務總監今成乾隨師は屆書を懷ろにして宗敎局に其結果を報告する等夫々須要の手續を終了して午餐の淸宴を張り錦織老師の發聲にて萬歲を三唱し各自歸途に就きしが翌十七日午前八時淺草慶印寺に評議員會開會中宗務廳より昨夜大僧正歸房せられ快よく當撰を承諾せられたれば（電報は行違ひとなれり）評會終了後品川妙國寺に小宴を張りたしとの特報あり仍て午後二時を期し妙國寺に廳員評議員其他有志數名參集したり圍碁數番の後盃盤席定りて錦織老師の有志を代表したる祝辭本多猊下の答辭等かたの如く行はれ何となく近來になき祥雲和氣の滿堂に靄靄たるものあり一同打くつろぎての献酬に懷舊談の花咲き里見圓海師が得意の古流生花を手取早に坐側にしてのけたる靑村道人が色紙手にして

醜草をきり靡けつゝ法の園
いよゝ花咲く春は來にけり

と眞面目に筆取りたるを動機に左の賡和は即席に出來上りたり

管長選擧之結果本多大僧正獨古當撰更無次點者票數亦未曾有可謂德望所然賦以祝焉

靄然獨露白雲間（久我獸宗）
遮莫吾家小爭事（錦織日敏）
八面玲瓏不二山（山岡會俊）
由來活殺胸中閑（山根顯道）

斯くて夕陽袖浦の淡波をなすの頃宴を撤し一同萬歲を叫んで鳳凰山の門を出てぬ、可祝、

▲總本山妙滿寺の大法會　京都總本山妙滿寺に於ては四月十一日より五日間大法會を修し併て征露軍戰死病沒者の爲めに追吊會を勤修せり今其模樣を報道せむに

毎朝午前六時　勤經
毎日午前九時より　大法會
毎日午后一時より　說敎
毎夕午后五時　勤經
毎夜午后七時より　演說

今茲に各敎區登山會の人名並に演題及辯士を擧げんに敎區代表者及有志登山會として

錦織大僧正、今成總監、叢日昌、淸瀨貞雄、能仁事一、野老乾爲、山岡會俊、廣部永眞、大橋日斐、赤羽日揮、高石快成、山本容廣、林葉顯正、梶木日種、島田顯恕、前田日敎、木村日順、田邊是敎、溝口會旭、伊藤憲洪、村瀨顯中、增田智靜、山田誠心、三好信道、野口會映等の諸師其外京都各寺院住職一同を合して四十名に近かゝりき演題及辯士は

開會の辭　野口義禪
一心欲見佛　伊藤憲洪
日蓮上人の人格　梶木日種
日蓮主義の統一的指導　大橋日斐
所感　山田誠心

吾人の向上心　山本容廣
三身論　山岡會俊
甘露の味　野老乾爲
兩種の折伏　秋葉顯正
不動不退　嶋田顯恕
本佛發現の靈力　能仁事一
一閻浮提第一本尊可樹此國　本多大僧正
信仰と佛陀の光明　增田智靜
軍國民の自信力　今成乾隨
信仰の新源泉　清瀨貞雄
演題未定　高石快成
吾家の安心　廣部永眞
閉會の辭　野口義靜

十五日夜十時より大廣間に於て慰勞會あり、餘興として鳥居女史の筑前琵琶あり、午后十二時、天皇陛下萬歳、陸海軍萬歳、顯本法華宗萬歳を三唱して目出度散會を告げたりといふ因にいふ大法會中は電燈を點じて參詣者の便を計りたりと

▲總本山妙滿寺の戰死病沒者追吊法要　四月十四日午后二時より戰病死者の爲めに追吊施餓鬼法要を營むべき旨を京都各新聞紙に廣告し尙京都市出征戰病死者遺族二百五十名に一々端書を以て通知せし事とて同時刻迄には遺族の參詣者堂の內外に滿ち大導師本多上人音樂に連れて淨侶を率ひて上堂し英魂の爲めに讀經唱題し野口部長の吊詞あり一々死者英靈の法號俗名を讀み上げ遺族者に燒香を許しかくて法會は莊重に閉ちられたり此日遺族者の喜悅はいふまでもなく參詣者皆隨喜の涙にくれたりといふ

▲征露軍戰死者追悼大會　第二回同追悼大會は千葉縣下第九敎區寺院發起によりて最々盛大に擧行せられたり同敎區は七里法華の西北隅に位し印旛千葉山武の三郡に跨り四面原野に包圍せらるゝ僻地方にして西南二敎區に接し東南は五敎區東北は八敎區に界し寺院の數他敎區より僅少にして區域他に倍せり「されば連絡交通の不便人の豫想の外にありと雖も各寺住職は能く水魚の思を爲し異躰同心其の分に應じて協力する處あるを以て布敎の隆盛區內の圓滿平和なる多く其の比を見ざる處なり「今回の戰役起るや國禱會に恤兵慰問に亦た演說に盡瘁せるは勿論昨年七月中第一回追悼大會を佐倉經胤寺に施行し今復第二回を施行するに到れり其の概況を記さんに同會場たる布田樂王寺は縣下隨一の道場にして大修繕落成の域に達せるを以て其の壯麗は申迄もなく此の道場を莊嚴するに數多の緞幕等と二丈四方の國旗四旒は會場及山門に交叉し五十餘旒の大吊旗は境內及其の沿道附近に樹立せられ永福寺檀家山本氏より寄附の軍樂隊は時々勇壯或は悲痛なる樂譜を奏せらるゝにても其の盛大なるの一班は知らるべく早天より打つとへる參拜者は千名に越へんとす時針既に十時を報じければ略式法要は中田大僧正二十餘名の僧員を隨へ音樂と共に上堂修法始まる此の刻は既に猊下總武線日向驛に御着の時なれば鈴木奉迎惣代は渡邊外三名の僧員及び信徒數名に奉迎旗を携へしめ出張せり略式法要終らんとせる時猊下は今成總監を隨へ無事御安着時正午晝餐御休息の內時震一時を報じ正式法要修行の頃に到るやさしもに廣き堂の內外境內は立錐の地なく受附し人員四千餘名遺族のみにても百三十名と計算せらるゝに到れり猊下は大導師として五十餘口の淨僧を隨へさせられ嘲朗たる音樂と軍樂とのもとに肅々として上堂修法讀經后猊下の諷誦文追悼會惣代中村僧都の追悼文東金警察の吊辭あり第二聯隊代表者京都大尉各町村長及遺族の燒香等ありて皆隨喜の涙に咽ばざるなく其雨背等四方共下心大觀喜せざる者なし二時三十分大法式終了夫れより日暮布敎員の開會の辭京都大尉の旅順攻圍談中村僧都の追悼の演說あり大尉か松樹山突擊の狀を談じ悲愴慘憺の景を叙するや席を立ち大尉が腕を握り「大尉殿」一言を發して涕に咽ぶ遺族あるに到る六時半全く終了小宴を開き中村僧都の發聲の下に本宗及敎區の萬歳

を三唱し七時半より最近日露戰爭大幻燈開會せられ今成總監特に沈痛なる一場の演說をせられたるは深く本會の光榮とする處なり只た恨むらくは時間の都合にて待ちに待ちし猊下の御親敎なかりしは殘念の極なりし因に出席僧員にては山岡伊藤の兩僧都金坂管事を始として數十名なりしと云ふ

●野口本山部長夫人の訃音　病を京都府立病院に養いし野口夫人三保女史は遂に四月二十日二十九歳にして逝けり、女史は千葉縣南橫川名門小倉家の女にして日蓮論批判の著者小倉道敏氏は其令弟なる由なるか今より十年前野口義禪師と結婚の式を擧げてより內助の功あり越へて二十五日妙滿寺に於て葬儀を行ふ本山信徒惣代正行院檀家の盡力せらるゝ處多く錦織大僧正登山ありしを以て大導師に請し姫路より野老師三宅氏大坂より古谷師丹波より三好師及京都寺院住職一同京都婦人報國會、妙滿寺國光婦人會、京都各新聞記者及本能寺本禪寺等の他宗派の僧侶の會葬者等合して七十名其他吊電吊文の來るもの多く葬儀は多大の同情を以て果されたりといふ

▲岡山通信　我篤信會に於ては去る三月十五日午后八時より山崎町本行寺に大演說會を開催仕り候廣告其他の準備は例に依り例の如くに御座候當日の參聽者は百五十餘名今其演題と辯士とを揭ぐれば左の如くに候。

無常觀　松崎事成師
佛敎倫理の根元　山本容廣師
皇軍戰捷の原由　能仁事一師

無事閉會を告げしは十一時過ぎにて候。

四月廿日は同じく同寺に例會を開催仕候當日和氣山本上人も出演の筈なりしが敎用を以て他行中にて候ひしが折よく東都より歸鄉され居候中川事顯師出演の事とて相變らず盛況を極め申候當日の演題及び辯士は

開會の辭　會員
戰爭の宗敎　中川事顯師
本尊論　松崎事成師
本尊上に於ける道德的審判　能仁事一師

散會せしは正に十二時にて候地方の委細は次號にゆづり申候

▲千葉縣第四敎區通信　二〇三高地の戰役に參加し光榮ある戰死を遂げたる故陸軍上等兵吉田與一氏の葬儀は此程遺骨到着せしを以て四月十五日豐田村腰當區自宅に於て執行せり當日は前田日應師にて成島泰行頌德文を讀し郡長、愛國婦人會長代、郡會議長、同村長、學校長、赤十字社醫會總代等吊詞を朗讀し區內寺院僧侶小學校生徒等一般會葬者八百名なりき次に昨秋已來旅順攻圍軍に加り赤坂山に於て名譽の戰死をとげたる故陸軍步兵伍長米良林作氏の葬儀は長生郡小林區自宅に於て村葬を執行せり當日菩提寺甲林老僧都導師にて成島泰行吊詞を讀み郡長代、愛國婦人會長代、警察署長、學校長赤十字醫會總代、同窓會總代、縣會議員等、の祭文親戚の答詞あり小學校生徒並に一般會葬者一千名弱にして近來の盛況なりき次に祈禱會は四月廿三日吉田法照寺に於て管事森川師導師にて之を執行せり演說は光本會龍聖祖の敎訓、成島泰行宗敎思想の發現＝森川會段＝事々偏感全四月廿八日中里法性寺に之を修し演題並に辯士＝上洛雜感秋葉顯正＝森川會段＝天佑論全四月卅日栗生野圓立寺例の如く森川師導にて修法を行し演說は日本會龍＝開會の辭＝本國＝成島泰行、舉國一致とは何ぞや＝森本會般五月四日七渡龍鑑寺にては當日午前祈禱會を修し土屋眞容告禱文を讀み午後一時よりは當寺及び檀信徒の發企になれる追悼會を執行し山主日董老師の導師にて成島泰行追悼文を讀み退場后庭中に建立せし卒塔婆に法味を捧げて決了し演說を開會し森川會般は人生觀てふ演題下に人生の大事なる雜誌を施與し大に祖訓を引證して眞摯熱烈の辯を振ひ成島泰行は時局と二大皇謨の發展にて奉公慈善救恤の二融合を論じ上下人心の歸一を歷史上より說き土屋眞容は

守護札問題質議者に告ぐ題下にて沼々數千言區内從來に於て諸種の關係を論し說き去り說き來り能く本問題の眞相を說明せられたり全く閉會せしは午後六時すぎなりき

▲三上義徹氏の消息　編輯局へ宛てたる書信左の如し氏は今遼東にある由

戰地に在つては上野向島の花を賞することは出來ない而るに赤十字船乘組の看護婦の持ち來りし二枝の櫻の花は非常に珍らしく感せられ候

貴兄の如き詩人は已に春の詩趣を謳ふて雄麗なる文字をあらはし給ひたる事なるべし小生の如きげに羨ましく候小生は櫻の花に觸るゝを得てうれしさのあまり駄句をうなり申候

清國にて櫻花を觀て

敷島の大和心をあらはして

ほこりがほにも咲ける櫻か

つみて來し船のたよりに櫻花

唐土までもかをりゆかしき

いろも香も神代ながらに櫻花

わが日の本のほかにあらめや

觀櫻の傷者の心情を讀む

戰ひて傷せし人も花の香に

醉ふてこゝろの快よからむ

當地の物價は甚だかけひき(支那的に)ありて一定せず支那人の手によれば洗湯は一回の湯錢十錢にて加ふるに臭氣はなはだしく閉口にて候市街における砂塵朔風に吹き卷かれて大空に舞ひ居るには一番の閉口に候露國の企てによりしモスコー橋は今回日本橋と改められ其下を例の東清鐵道の軌道ありて大連の棧橋まで而かも船まで横つけにて候その日本橋の北方は敵の建築物なりし煉瓦造りの宏壯なる建物にて有之候本派本願の從軍僧も居りてチョット上手なる辨論相吐き居候此地内地の事情とはすべてかはり不申候

何れ其内又々申上べく候也

▲名古屋の戰死者追吊大法會　名古屋市に於ける愛知婦人國恩會は第三師團出征戰死者の爲めに屢々追吊會を營み各宗管長は順番に其導師を勤めけるが今回は我顯本法華宗にて導師を勤むる順番となり本月十五日古渡町靈山寺に於て非常に盛大なる法要を修したる由今其模樣を聞き得たれば少しく記さんに管長本多大會正は東京より御飛錫在せられて導師を勤め京都總本山よりは本山部長野口僧正を始め本山役員數名出張し其他隣縣としては靜岡よりは十數名岐阜三重等よりも列席し參拜者は縣知事市長留守師團長各將校其他各級の役員職員遺族は勿論のこと公私設團体に至る迄悉く參列し無量數千名さしもに廣き境内伽藍も立錐の餘地なきに至れり式は午前十時に始り午後一時頃終れり特に此法會に於ての大善根は愛知婦人國恩會施主にて白米四十五俵を本堂に積み重ね式後出征者遺族の貧困なるものに悉く施與したりと云ふ嗚呼布施はこれ百福莊嚴の資也施者被施者俱に現當二世福德莊嚴疑なきもの歟矣。

▲雜司ヶ谷大學林同窓會の設立　大學林内の有志者は頃日同窓會を設立し明治二十三年以後大學林出身者の贊成を得て是等の諸氏を會友としられ〳〵部署を定めて事業に着手する由

▲顯本法華宗僧侶の出征者　前號に概畧を報せしが書漏れたる分を報ずること〳〵せり

千葉縣第四教區中里圓頓寺内
歩兵第三十六聯隊第一中隊目下廣島病院在
横山賢明

栃木縣隨谷郡北高根澤村龜梨妙福寺住職
秋田歩兵第十七聯隊補充大隊第六中隊第七班
山口宏雄

好評嘖々！！一版五千部將に盡きん！！！

小倉道敏君著

日清文論批論

▲洋裝頗美本菊版全一冊▼
▲正價郵税共金二十二錢▼

痛快々々近世の活文字！高橋五郎の愚論に憤慨せる者も、冷笑せる者も、中毒せる者も、未だ知らざる者も、共に讀め

本書の内容一日蓮論著者高橋五郎足下に與ふ二日蓮論とは如何なる書ぞ三日蓮深密傳とは如何なる者なりや四日蓮深密傳と日蓮論著者五日蓮論と深密傳兩著者の動機六遇去に於ける日蓮論七高橋五郎君の日蓮論の價値果して如何にや八日露戰爭は日蓮主義事實の發動

本書批評の一部　櫻溪詩客曰割鷄何必要牛刀、諧謔文辭度野郎、白藤曰金鐵の大文字鏘々として耳に聲あり武陵曰正々堂々と五郎を破したのが男らしい、高岡新聞曰著者の熱誠は確かに現はれて居る殊に『身延山は山にゾある寺にゾある宗教の大精神が一教會堂寺院中にのみ之あらんとは何たる愚見ぞ』とは實に面白しと其他好評日々到着！

發兌　京都三條東洞院上ル町　東京堂、須原屋、自活布教隊

大賣捌　村上平樂寺書堂

中川一方齋の墓

右者會津妙法寺檀家中川家の親戚にして兼て東京に居住し旨人にて醫師を業とせし人の墓なり此墓は顯本法華宗寺院に埋葬しある由に候へども其寺院は何れなるや判然せず何卒御寺院に於て一應御取調へ被下下名へ御一報を煩し度候

淺草區花川戸町三十二番地
山本方　廣嶋金十郎

大學林公告

本林生徒ノ食費ハ毎月各師僧ヨリ直ニ本林會計ヘ宛テ郵送スヘキコトハ林則第五十四條ニ規定セラレタリ然ルニ往々此規定ヲ履行セサル方有之不都合尠ナカラス依テ自今ハ毎月五日迄ニハ期日ヲ誤ラス各師僧ヨリ本林會計ヘ宛テ直ニ郵送スル樣ニ致度右及告示候也

明治卅八年五月十日

顯本法華宗大學林

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
全三十八年五月十五日發行統一第百廿二號毎月一回十五日）

御雛人形
附ぞく小道具

武者人形
東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

移轉廣告

本布教所左ニ移轉ス
神戸市兵庫塚本通四丁目廿三ノ卅八
顯本法華宗布教所
主田智量

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
一講讀申込の節は住所姓名を除書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅八年五月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木曄學
印刷所　北澤活版所
東京市淺草區南松山町四十五番地

發行行　統一團
東京市淺草區南松山町四十五番地